

「紀行文」記述例

小江戸紀行

川越は、どこかなつかしい町だった。

秋晴れの中を電車にゆられて数十分、私たちは小江戸・川越を訪れた。ガイドブックを手にしながら蔵造りの町並みを歩いて、菓子屋横丁へ向かう。幼いころ食べた記憶はある駄菓子が並んでいた。みんなでおしゃべりしながら楽しく食べた。買いすぎて食べきれないものをバッグにしまった。そこから、川越氷川神社へ。ここは縁結びの神社としても知られ、たくさんのかップルが境内でおみくじをひいたり、スマホで撮影しあつたりして楽しんでいた。休日ということもあって、かなりのにぎわいだった。

次にすぐ近くの川越城本丸御殿へと向かった。川越城は、室町時代に太田道灌らが築いた城で、後に徳川家康が関東に配置換えになって以来、徳川家の重臣たちが代々受け継いでいった城だ。その城内に、三芳野神社という神社があるというので足を伸ばしてみた。素朴な小さな社だった。ここまで来ると、さきほどのにぎわいは全く感じられなかった。少し離れた広場からたまに聞こえる地元の子供の遊び声が、この社の静けさを逆に引き立てていた。この三芳野は、『伊勢物語』第十段で、武藏国に下ってきた男に、その地の女の親が、みよしののたのむ（田の面）の雁もひたぶるに君が方にぞよると鳴くなる

と詠みかけ、男が、

わが方によると鳴くなるみよしののたのむの雁をいつか忘れむ

と歌を返した、その「三芳野」だそ�だ。「田の面」というが、現在は周りに田畠はほとんどない住宅地だった。昔と随分変わったのだろうと思ったが、駅までの帰り道、遠くの空に雁が連れ立つて飛んでいたのを見た。時代は違つても、同じ地の空に同じ鳥が飛んでいるのだと思うと、相手を想う歌を詠みあつた昔の光景と、スマホを撮影しあいながら楽しんで帰つて行く夕暮れのかップルたちの現在の光景とが重なつた気がした。

家に着いて、食べきれなかつた駄菓子を食べると、どこかなつかしい味がした。